

開放性がダイバーシティ・イデオロギーに与える影響

—視点取得の媒介効果の検討—

服部 典利子 坂田 桐子

広島大学大学院総合科学研究科

問題

- ダイバーシティを高めるような政策 (e.g.改正入管法) が推し進められる
→ 外国人が増えたり、多様な社会となることが想定される
→ しかし、日本人がどのようなアプローチをするのかは不明
⇒ **ダイバーシティ・イデオロギー**に着目して検討を行う

■ ダイバーシティ・イデオロギー (以下, DI)

- DIには、異なる2つのイデオロギーがあるとされる

多文化主義 (multiculturalism: 以下, MC)

他集団の異なる観点や文化を認識し評価する

カラーブラインドネス (colorblindness: 以下, CB)

自分とは異なる集団やカテゴリーのメンバーとしてではなく、すべての人間を個人として扱う (Hahn et al., 2015)

- CBと同化主義は同じ概念 (e.g. Plaut et al., 2009) なのか、違う概念 (e.g. Hahn et al., 2015) なのか、研究者間で一貫しない

同化主義 (assimilationism: 以下, AS)

集団の差異を最小化するため、支配的な集団の規範を採用するよう求める (Hahn et al., 2015)

- ASはCBと弱い, MCと弱い~比較的強い負の相関 (Hahn et al., 2015)
⇒ MC及びCBはASと区別する必要がある?

■ MC支持とCB支持のメカニズム (Sparkman et al., 2019)

- 独創的で好奇心が強いとされる経験への開放性と、視点取得は正の関連
- 他者の視点を積極的に検討することは、文化的なバックグラウンドの視点に立つ場合はMC (研究1) と、その個人の視点に立つ場合MC及びCB (研究2, 図1) と関連がある

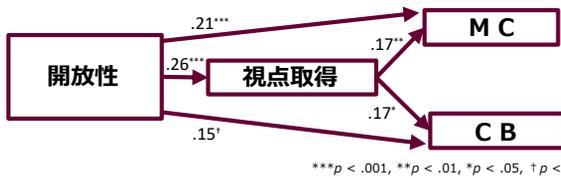


図1. Sparkman et al. (2019)の研究2の報告を参考にしたパス図

目的

- ASについてMC及びCBとの関連を探索的に検討
- 開放性及び視点取得がMCとCBに及ぼす影響を検討

仮説

先行研究と同様に、**開放性及び視点取得はMCとCBに正の影響を与える**

方法

■ 調査対象者

日本国籍の大学生198名 (18.61±0.77歳, 女性91名, 不明5名)

■ 質問紙構成

DI項目 (Ryan et al., 2007 : 6項目, Hahn et al., 2015 : 8項目, 7件法)

開放性 (和田, 1996 のBig Five 尺度より12項目, 7件法, $\alpha = .82$)

視点取得 (Davis, 1983のIRIより4項目, 5件法, $\alpha = .60$)

DI方針への支持 (5項目, 7件法, 1 : 非常に反対~7 : 非常に賛成)

- MC支持項目 (「特定の宗教の子どもたちのために、学校給食は専用のメニューを用意する」など) 2項目 ($r = .238, p < .01$)
- CB支持項目 (「受験や就職の書類審査で出身や人種が特定できないように、履歴書には名前や写真を載せず、識別番号をそれぞれに割り当てる」など) 2項目 ($r = .267, p < .01$)
- AS支持項目 (「移民や外国籍の子どもに対しては、日本の伝統文化やマナーを学ぶ授業の受講を推奨する」) 1項目

外国籍の人との付き合いの程度 (2項目, 5件法, 1 : 全くない~5 : 頻繁にある)

- 一緒に食事に行くなど個人的な親しい付き合いがあるか ($M = 1.74, SD = 1.00$)
- 会えば挨拶する程度の付き合いがあるか ($M = 2.45, SD = 2.00$)

結果

■ DIの尺度構成 (探索的因子分析)

・2因子構造を採用した

表1. DI項目の因子分析 (最尤法・プロマックス回転) の結果

項目	MC 因子	CB 因子	共通性
7. 協力的な社会のためには異なる民族集団の独特な特徴を理解しなければならない	.793	-.052	.598
6. 調和のとれた社会を築きたいのならば、私たちはそれぞれの民族集団独自の伝統を維持する権利があることを認識しなければならない	.706	.034	.520
13. 人々はこの民族集団の違いを認識し、その違いにより敏感になるべきだ	.405	-.009	.161
14. 人々は自国の民族の多様性を認め、それを評価するべきだ	.354	.186	.215
10. 人々はこの民族集団のメンバーとしてではなく、すべての人を個人として扱うべきだ	-.123	.831	.621
11. 私は生活の中で、人を「所属する民族集団」ではなく、「個人」として見る見方をしている	.076	.556	.350
4. 民族や人種、または他の社会的背景よりも、個人の個性的な特徴に注意を払うことが重要だ	.191	.445	.305
α 係数			
	.66	.65	
寄与率			
	1.74	1.54	
因子間相関			
		.412	

■ 尺度間の関連

・ASはMC及びCBと有意な関連がみられなかった

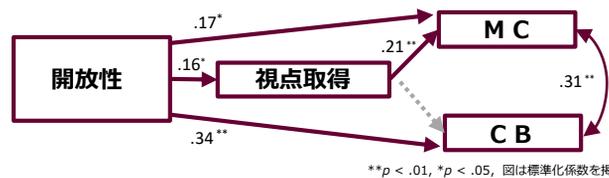
表2. 測定変数の記述統計量及び相関係数

	M	SD	開放性	視点取得	MC 因子	CB 因子	MC 支持	CB 支持
開放性	4.12	0.81						
視点取得	3.26	0.68	.157*					
MC 因子	5.35	0.83	.195**	.244**				
CB 因子	4.84	1.04	.315**	.119†	.360**			
MC 支持	4.61	1.18	.073	.092	.295**	.126†		
CB 支持	3.84	1.08	.123†	.001	.248**	.248**	.505**	
AS 支持	4.48	1.27	.079	.001	.090	.062	.216**	.319**

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

■ 開放性及び視点取得がDIに及ぼす影響 (SEM)

- 視点取得はMCの媒介要因になっている ⇒ **仮説を支持**
- 視点取得はCBに影響を及ぼしていない ⇒ **仮説を不支持**



** $p < .01$, * $p < .05$, 図は標準化係数を掲載 ($\chi^2 = 1.38, p = .24, GFI = .996, AGFI = .964, CFI = .994, RMSEA = .045$)

図2. 開放性及び視点取得のDIに対するパス図

考察

- DI項目について、先行研究と同様の2因子構造を確認
→ 無相関であった為、ASとは区別できると考えられる
→ **ASをCBと別のものだとする先行研究 (e.g. Rosenthal & Levy, 2012; Hahn et al., 2015) を支持**
- MCはMC支持及びCB支持と弱い正の相関
→ CB支持項目が適当ではなかった可能性
- 開放性の高い人が他者の視点を積極的に検討することはMCに正の影響を与える
→ **Sparkman et al. (2019)の2つの研究結果と一致**
- 今後の展望
・CBに対して視点取得は開放性の効果を媒介していなかった
→ 身元にいる外国籍の人の立場に立ったうえで、「個人として扱う」という経験が少ない可能性
⇒ **外国籍の人と関わりが深い人のCBについて検討が必要**
- ・MC因子とCB因子のα係数が低い
⇒ **MCとCB, ASについて尺度を作成し、更なる検討が必要**